

O10-06

パルスオキシメータで新生児の熱傷を生じた1症例

葛飾赤十字産院 看護部

○荒巻 東香

【症例】女児。正常に妊娠・分娩経過を辿る。出生後にパルスオキシメータを左前腕に装着。17分後に装着部位の間違いに気づき巻き替えの際に熱傷を発見。熱傷2度と診断された。センサ装着には3Mのコーバン™を使用。使用機器はコヴィディエンジャパンのパルスオキシメータN-550Plus、ネルコアオキシセンサIII N-25。

【倫理的配慮】対象児の両親に事象の報告について同意を得た。

【結果】使用機器の明らかな異常や今回の原因に繋がるような事象の再現性は見られず原因究明には至らなかった。

【考察】SPO2プローブを装着しての発光部の温度上昇は通常2度程度であり¹⁾、センサ温度は41度以下と定まっている²⁾。発光部位が43度に上昇したとしても熱傷を引き起こすには3時間20分必要³⁾であり、理論上は今回の事象は起こらない。過去の低温熱傷報告では本症例のような短時間での熱傷発生の報告は見られなかったが、熱傷の一因として「圧迫による皮膚損傷」をあげている。これは、ネルコアセンサを固定する為にテープを強固に巻くことで皮膚の接触部に圧迫が加わると、皮膚血流が妨げられる為血流による熱希釈が機能せず、熱が蓄積して、受傷までの時間は短縮されるというものである⁴⁾。本症例も伸縮性のあるテープで固定していた為、過度の圧迫は否定できず熱傷の一因と推察する。従って、スタッフが正しい装着方法と注意点を認識することが重要である。

【文献】1) 鶴川貞二：パルスオキシメータの現状及び問題点。医科器械学。Vol.77, No.2, 52-58, 2007 2) 小澤秀夫：パルスオキシメータの規格化医科学。Vol.75, No.12, 863-867, 2005 3) F.C. Henriques Jr. : Studies of Thermal Injury, V. The Predictability and Significance of Thermally Induced Rate processes Leading to irreversible Epidermal Injury, Archives of Pathology, Vol.43, 489-502, 1947 4) 井上貴昭：低温熱傷。総合臨床。Vol.48, No.9, 2164-2166, 1999

O10-07

婦人科腹腔鏡手術における術後悪心嘔吐対策の試み ～内関刺激の有効性～

岐阜赤十字病院 看護部

○藤田なぎさ、齊藤 理恵、永原 健児、山田 忠則、
粕谷 由子

【はじめに】術後悪心・嘔吐(PONV)は、全身麻酔後の合併症の一つである。当院で多く行われている婦人科腹腔鏡手術はPONVの危険因子の多い手術であり、その対策について、他部署とも連携し検討してきた。その中で、PONVに対する非薬物療法の一つに、内関刺激が有効であるという報告があり、患者自身が実施できる悪心嘔吐の対策として、内関の圧迫刺激の有効性を検討したため報告する。

【研究方法】対象：2011年8月から12月までの婦人科腹腔鏡手術を受けた患者71名 方法：質問紙法 術前にパンフレットを用い手動的な内関刺激方法と研究の主旨を説明し、質問紙を配布。同意を得られた患者に術後に無記名で回答を得た。

【結果】回収率77.5% (55名)。内関刺激を実施した症例は25名(54.3%)、未実施の症例は21名(45.7%)であった。未実施の理由には、嘔気がなかった20名、症状が強かった1名があった。実施した症例のうち、症状が消失・軽快した症例が13名、症状が不変だった症例が12名であった。また、症状の軽快は、軽い嘔気時に内関刺激を実施した場合に多い傾向にあった。

【考察】患者自身で行う内関刺激は、患者が負担なく受け入れることができ、副作用のない方法であることが利点であり、症状の軽い場合は効果が期待できると考えられる。しかし、術後疼痛やPONVの程度により、患者自身で行うことは困難である。

【おわりに】今回、患者自身による内関刺激のPONVに対する効果について検討した。本法は、薬物療法等の補助的な役割として有効性があると考えられた。今後、術直後から安定して正確に行える刺激方法を工夫する必要がある。

10月18日(木)
一般口演